

科目名	日本政治史論特講	担当者	タキガワ シュウゴ 瀧川 修吾	期間	通年	単位数	4
-----	----------	-----	--------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>「温故而知新，可以為師矣」というように，過去の歴史的事実から，向後の政治をより良くするための教訓を得んとする試みは，政治史という学問の最大の使命であろう。政権の在り方や，制度の不備，格差や貧困といった俄には解決しがたい問題に起因する内政上の不満を，外交や軍事に対する人々の関心を掻きたてることで，巧みに逸らす政治手法は，他国との関係を大前提とするグローバル社会にあって，あらゆる民主主義国家とその国民が対決し，克服していかなければならない脅威といえる。本講義では，広く歴史とは何かについて学んだ上で，この厄介な問題につき，幕末から明治にかけての日本で登場した征韓論を素材に，皆さんと一緒に考えてみたい。</p>		
到達目標	<p>【一般目標（GIO）】 日本政治史や思想史の専門書を熟読し，内容を深く理解する洞察力や省察力を養い，その成果を纏め，独自の観点から論評・解説する論理的・批判的思考力を修得する。</p> <p>【行動目標（SBOs）】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. E. H. Carr の著作を精読し，各自の歴史観を再確認し，そこで学んだ理論の妥当性につき，日本史上の歴史的事実を事例にして考察を加えてみる。</li> <li>2. 社会科学における言葉の定義の重要性につき，「征韓論」を事例に理解する。さらに徳川幕藩体制下の対馬藩が直面した危機について理解する。</li> <li>3. 総じて，教養を身につけるために学ぶ通史とは異なり，いわば歴史を通じてものごとを深く考える楽しみに接し，自己の眼前に展開する諸問題につき，歴史的に思考する能力を養う。</li> </ol> <p>【準備学修項目と準備学修時間】 テキストないし指示された参考書を熟読してもらう（概ね新書1冊と学術論文2本）。学修時間は個人差が生じざるを得ないが，質問や用語の調査なども入れて45時間超を想定している。</p>		
学修方略 (方法)	<p>【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】 メールや添付ファイル，manaba を活用し，双方向性を重視した指導をおこなう。</p> <p>【学修方略（LS）】 履修者の皆さんが，これまでどの程度，歴史を学んできたかで，学修方法も再考を余儀なくされるものと予想される。よって「基本教材1」の「I 歴史家と事実」をある程度読み進めた段階で，一度，皆さんからメール等で連絡をもらい，当方が皆さんの習熟度や理解度を把握することとしたい。その上で必要に応じて参考図書を紹介したり，レポートの難易度や分量を加減したりするなど，調整し，皆さんそれぞれの状況に応じた到達目標が実現されるような指導をおこなう。</p>		
スケジュール	<p>「基本教材1」から出題した課題は，6月末までを目安に学習を終え，「レポート課題1」は7月15日を，「レポート課題2」は8月15日を，それぞれ初稿の提出締切日とする（以下全て，可能であれば，締切日以前の提出を奨励する）。最終稿は9月15日を提出期限とする。</p> <p>「基本教材2」から出題した課題は，10月末までを目安に学習を終え，「レポート課題1」は11月15日を，「レポート課題2」は12月15日を，それぞれ初稿の提出締切日とする。最終稿は1月11日を提出期限とする。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	70%	教材から一定の知識を修得し，それらを客観的かつ論理的に纏めることができているか。また，学んだ知識を批評したり，援用したりするなど主体的に活用することができているか。
	平常評価	30%	当方がおこなった指導や指摘を，適切にレポートへ反映することができたか。レポートの提出期限の遵守等，コミュニケーション上のルールを守ることができたか。
履修者への要望	<p>関連科目を大学で受講していなくても及第点がとれるように，極力，親切丁寧な指導を心掛けるが，その成否は，やはり皆さんがまめに連絡をくれるか否かに掛かっていると思われる。質問してくれたことに対して減点をするようなことは一切ないので，積極的かつ気軽に質問をして頂きたい。</p> <p>なお，皆さんが効率よく学修を開始するためには，当方にもしかるべき準備が必要となる。よって，履修登録をすると同時に，その旨を担当教員にメール（<a href="mailto:takigawa.shugo@nihon-u.ac.jp">takigawa.shugo@nihon-u.ac.jp</a>）で報告することを履修の条件としたい（その後，履修取消しをした場合もご一報頂きたい）。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： E.H. カー著・清水幾太郎訳 教材名： 『歴史とは何か』（岩波書店，1962年，原著は出版） ISBN：4-00-413001-8（820円+税）
	本書は、E.H. Carr が1961年にケンブリッジ大学でおこなった講演をもとに編まれたもので、歴史を研究する者にとっては必読文献といっても過言ではない。本書の出版からすでに半世紀が経過したが、ここで提示されている議題の数々がその重要性を失うことは、この世に人間や社会が存在する限り、決してないであろう。
参考図書	原著“ <i>What is history</i> ”は、幸いインターネット上でも閲覧できるようなので、訳本と併読することを推奨したい。もちろん Amazon 等で、ペンギンブックスなどのペーパーバックを購入するのも良い（千数百円程度）。
履修上のポイント	同書では、劈頭で掲げられていた命題が先々まで深い意味をもっていたり、再び別の視点で論じられたりといったケースがあるので、論点をノートに書き出して読み進めると良いであろう（本に線を引いたり、眉批を直接書き込むのも良い）。呉々も、新書をたった一冊読むだけなどと侮らず、その分、しっかりと基本教材を「精読」してもらいたい。読み進める中で、知らない人名や事件等が出てきたら、最低限、電子辞書やインターネットなどを用いて調べるようにすること。
レポート課題 1	歴史とは「歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との絶え間ない対話」であるという Carr の主張は、いったいどのような意味か。現今を生きる自分自身の体験や経験を踏まえて論じなさい。 <b>留意点</b> ：Carr の所論と皆さんの意見等とが混在しないように、正しい「引用」と「援用」の技法を駆使してレポートを作成すること（換言すれば、要旨を纏めるだけでは不十分です）。
レポート課題 2	Carr が述べる「歴史における必然」と「歴史における偶然」とはどのような問題か。要領よく論点を纏めると共に、適当な日本史上の歴史的事実を随意に用いて説明を試みなさい。 <b>留意点</b> ：レポートの構成や用いる事例などが決まった段階で、一度当方に相談の連絡をくれた方が効率的と思料される。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 瀧川修吾 教材名： 『征韓論の登場』（櫻門書房，2014年）ISBN：978-4-901250-46-7（2,500円+税）
	本書は、「征韓」論が幕末から明治の政治空間にどのようにして登場したかを、政治史・思想史的なアプローチで探求した専門書である。いわゆる博士論文を刊行したものであるため、章・節の設け方や脚注の付け方等々、皆さんがレポートや修士論文を作成するにあたって書式の見本となれば幸甚である。
参考図書	本書一冊を読破するだけでも骨が折れると思われるので、教材としては「序章「征韓」論の歴史的意義と論理的構造」と「第一章 ロシアによる対馬占拠事件」を使用する。参考図書については、適宜、紹介をする。
履修上のポイント	同書は専門書であるため、日本史の学術論文を初めて読むという履修者には、おそらく読みづらいものと思われる。まずは根気強く、導入部にあたる序章を読んでもらいたい。「基本教材 1」と同様、未知の人名や事件については調べる努力を惜しまないで欲しい。ついで第 1 章を読み終えたところで、「レポート課題 2」を具体的にどのようなテーマにするのか相談したいので、必ず連絡をもらいたい。そこで参考図書も決まるので、遅くとも 10 月初旬には第 1 章を読み終えて欲しい（場合によっては、先に第 1 章を読むと良いであろう）。
レポート課題 1	幕末から明治にかけての「征韓」論が当事者および歴史家によってどのように認識され、その結果、どういった学説が形成されてきたかについて論じなさい。 <b>留意点</b> ：呉々も「基本教材 2」の切り貼りにならないように、当方の指導を受けつつ、自分の言葉でレポートを作成すること。
レポート課題 2	幕末から明治の日本を取りまいていた国際的環境をテーマに、各自で自由に議題を設定し、これについて論じなさい。 <b>留意点</b> ：履修上のポイントにも書いたように、「自由」とはいえども、当方と相談の上で議題設定をすること。